オリッサ州立博物館の密教美術

森　雅秀

はじめに

オリッサ州立博物館（Orissa State Museum）はインド北東部のオリッサ州の州都ブバネシュワル（Bhuvaneshwar）の中心部に位置する。オリッサ州における最大の博物館である同館は、密教美術の重要な作品を多数収蔵している。ビハール地方とベンガル地方とならんでオリッサが、インドにおける密教美術の宝庫であることはよく知られている。とくに、佐和隆研氏を中心とした調査隊が1980年にこの地で本格的な調査を行い、胎蔵大日如来や、マンダラ的な構造を持つ尊像彫刻を発見してからは、日本密教とのつながりからも注目されてきた。なかでもカタック地区（Cuttak Dt.）の３つの遺跡ラトナギリ（Ratnagiri）、ラリタギリ（Lalitagiri）、ウダヤギリ（Udayagiri）では、僧院、仏塔などからなる大規模な僧院の遺構が確認され、おびただしい数の密教美術が出土している。オリッサの密教美術は、カタック地区の他にも、州都ブバネシュワルや、ヒンドゥー教徒の聖地であるプリー（Puri）、太陽寺院で名高いコナーラク（Konarak）などを擁するプリー地区（Puri Dt.）、カタック地区の北に隣接するバレーシュワル地区（Baleshwar Dt.）、さらにその北でベンガル、ビハール州との境に位置するマユルバンジュ地区（Mayurbhanj Dt.）などからも出土している。このうち、カタック地区の３遺跡は1950年代から本格的な発掘作業が進められてきたが、その他の地区はほとんど調査がなされていない。

オリッサ州の密教遺跡から出土した作品は、ニューデリーの国立博物館（National Mus.）、カルカッタのインド博物館（Indian Mus.）、ビハール州のパトナ博物館（Patna Mus.）、そしてここで取り上げるオリッサ州立博物館におもに所蔵されている。一部の作品は海外にも流出している。カタック地区の３遺跡の中では、ラリタギリにはやくから収蔵庫が建設され、保管、展示が行われてきた。近年、ラトナギリにも大規模な展示館が完成し、筆者がこの地で調査を行った1996年１月の段階で数箇月後の開館が予定されていた。ただし、僧院や祠堂の本尊や大規模な作品のいくつかは遺跡にそのまま置かれている。残る一つのウダヤギリは、現地に数点の作品が安置されているのを除き、主要な作品は上記の各地の博物館に分散している。ラトナギリの作品はインド考古局の Mitra

オリッサ州立博物館全景

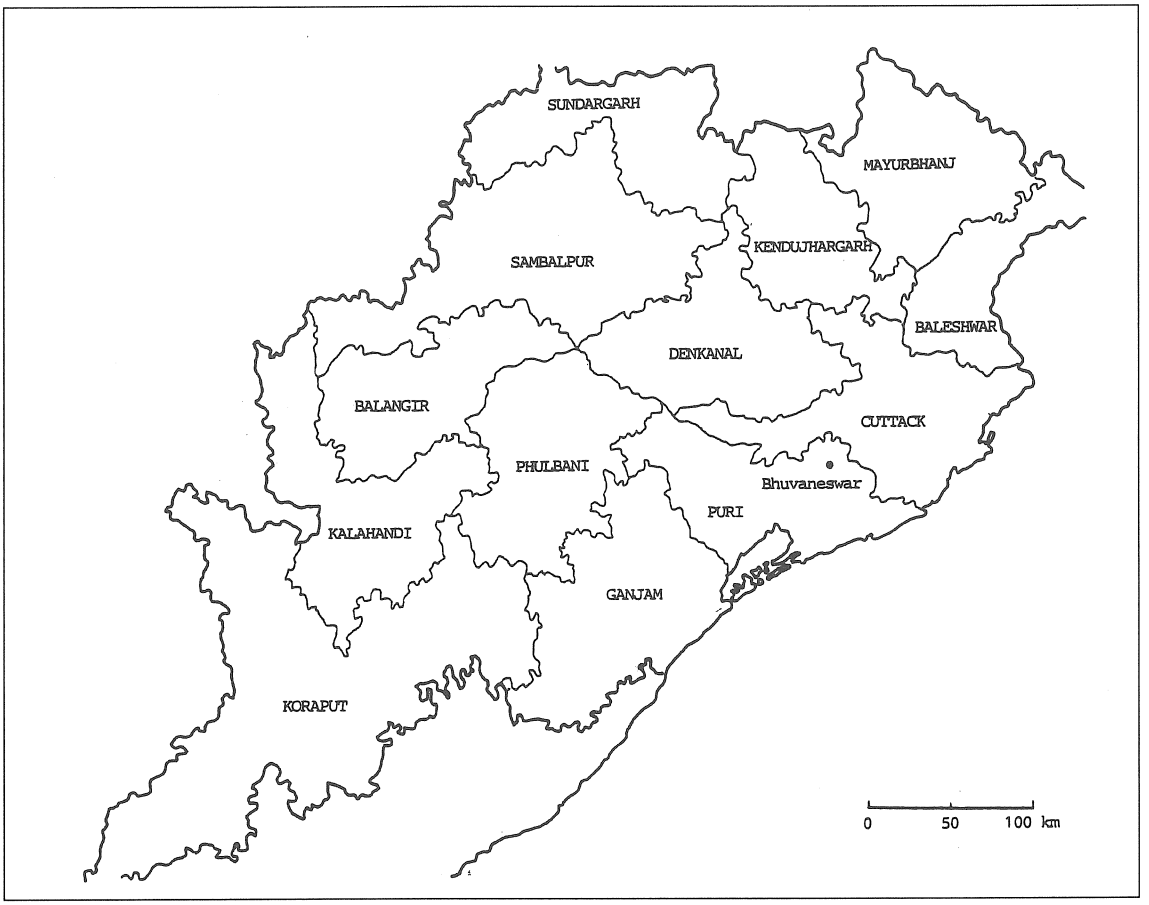
による大部の報告書（1981、1983）によって、その全容がほぼ明らかになっている。また、3遺跡を中心としたカタック地区の密教美術については、佐和氏の編による研究書（1982）がくわしい。ニューデリー、カルカッタ、パトナの各博物館の主要な作品も、それぞれ個別に紹介、研究がなされてきた。しかしながら、オリッサ州立博物館に所蔵される密教美術は、わずかにSahu（1958）やBénisti（1981）の著作でその一部が紹介されたのみで、これまでほとんど知られていなかった。

本稿でとり上げたのは、オリッサ州立博物館が所蔵する石像彫刻の密教美術である。各作品を写真図版で紹介し、それぞれの概要と図像学的な特徴の記述、類例との比較などを行った。29点の作品について報告を行うが、いずれも州立博物館の展示室に置かれている作品である。

作品の出土地は、すでに述べたカタック以下の4つの地区にほぼ限られ、とくにカタック地区とブバネシュワルからの作品が多い。オリッサ以外にもビハール州から出土した作品が数点含まれる。尊像の種類から見た作例数は、如来像が11例と最も多く（奉献塔の1例を含む）、ついで観音が6例（蓮華手1例を含む）、女尊5例、文殊3例、金剛手2例などとなっている。如来と観音の作例が多いのは、インドの密教美術の全体の傾向を反映している。

オリッサ州立博物館には、プリー地区の海岸寄りにある仏教遺跡アチュトラジュプル（Achutrajpur）出土のブロンズ像が収蔵されている。比較的規模が小さいこれらの作

品は、すべて収蔵庫に保管され、公開されていないため、ここでも取り上げなかった。なお、アチュトラジュプル出土の作品についてはすでにMitraによる研究（1978）がある。また、展示室にはすぐれたヒンドゥー彫刻もかなり展示されている。この中には七母神（Saptamātṛkā）のセットなど注目すべき作品も少なくないが、これらについても別の機会に紹介したい。ジャイナ教美術も何点かあるが、これも同様である。



オリッサ州行政区

オリッサ州立博物館の密教美術作品リスト

凡例

番号 **(1)名称**

(2)出土地

(3)データ 材質、年代、法量等。

(4)出典 著者名、刊行年、図版番号の順に記載。複数の文献に含まれる場合、順序は刊行年代にしたがう。[ ] 内の図版番号は本稿末尾の図版に対応する。

(5)図像学上の特徴等 印、持物、装身具、坐法、光背、台座などの主要な図像学上の特徴と、保存状況、類例との比較等について記載する。

仏

1 (1) Vairocana

(2) Bhuvaneswar

(3) Black Stone, 10c(Mus)

(4) **[図5]**

(5)転法輪印。宝冠仏。菩薩形。結跏趺坐。通肩。宝冠、冠帯、円形の耳飾り、首飾り。頭部表面、両腕の肘より先の部分磨滅。長方形のパネルに作った浅い龕の中の浮彫。左右にはピラー、上部にはキールティムカ(Kirtimukha)、マカラ(Makara)、水鳥、植物のモティーフの浮彫がある。小規模な作品なので、奉献塔の四方の龕の一つかもしれない。転法輪印を示し宝冠をつけた如来像は、オリッサではこのほかにウダヤギリから規模の大きな作品が出土しているが(図版は頼富 1992a:図6、1992b:図4;頼富・下泉 1994:口絵、p. 74;宮治 1995:図12)、それ以外は知られていない。オリッサ出土の転法輪印を示す如来形の作例は6例を数える(一部の図版は Mitra 1981 : Pl. CXXXIX ; Bénisti 1981:Fig. 168 ; 宮治 1995:図11 ; 頼富 1992a:図3 ; 宮治 1995:図13 ; Sahu 1958:Fig. 48として発表されている)。また、奉献塔の龕中の浮彫の作品で、菩薩形をとると思われる転法輪印坐像も4例ある (Mitra 1981 : Pls. LXV (A), LXV (B), LXIV (D), CLXXXIII (D))。パーラ朝の版図からは、転法輪印を示す宝冠仏の出土例は、次の本稿作品番号**2**を除き3例ある。このうち2例は仏伝の八相中の七相を周囲に配し、残り1例は左右に仏坐像を置く(宮治 1993:30-31, 56, 図22)。

2 (1) Buddha

(2) Bihar

(3) Black stone, 69cm, 9c (Mus)

(4) **[図6]**

(5)転法輪印？。宝冠仏。菩薩形。結跏趺坐。通肩。宝冠、冠帯、円形の耳飾り、首飾り。首から上部、両手首欠損。右脇侍は観音立像。右手与願印、左手は蓮華を持つ。化仏を付けた髪髻冠。耳飾り、首飾り、臂釧、腕釧、聖紐。左脇侍は弥勒立像。装身具は観音と同じ。仏塔を付けた髪髻冠。右手は施無畏印。左手に龍華を持つ。台座中央に法輪と二鹿、その左右に獅子と帰依者の浮彫。台座に銘文。観音と弥勒の2菩薩を脇侍とする宝冠仏坐像はこのほかに7例が知られているが、いずれも触地印を示す（宮治 1993：32、57）。如来形で転法輪印を示し、脇侍をともなう作例は5例ある（宮治 1993：27-28、56、このほかにバングラデシュのヴァレーンドラ博物館 Varendra Mus. に1例ある（Acc. No. 267））。このうち3例は脇侍は観音と弥勒の組み合わせてあるが、残りの2例はそれぞれ観音と金剛手、観音とターラー？の組み合わせである。

3 (1) Buddha

(2) Khadipada, Barasore

(3) Stone, 7c (Mus)

(4) Sahu 1958：Fig. 47；頼富 1991a：図6（Sahu の図版の転載）**[図7]**

(5)触地印。如来形。結跏趺坐。全体は首より上部、上半身、下半身の3つの横長の部分を重ねて制作されている。頭部表面磨滅。同じ Khadipada からの出土品として、オリッサ博には蓮華手、金剛手の一対の作例も収蔵されている（本稿作品番号**17**、**18**）。類似の触地印仏坐像は、カタック地区の3遺跡からも出土している。ラトナギリは僧院本堂（Mitra 1981：Pl. CXXⅣ（A）；佐和 1982：口絵5、13図；Huntington 1985：Pl. 19.44；Bénisti 1981：Fig. 163）、ラリタギリは現地収蔵庫（Sahu 1958：Fig. 22；佐和 1982：挿図30、102図）、ウダヤギリは僧院本堂（頼富 1992b：図2）と参道脇の遺構（佐和 1982：口絵15、130図；頼富 1990：図10）に各1体ずつある。作風はほとんど共通で、形式化した体軀は左右の対称性が強調され、平板な印象を与える。全体が上中下の3つの部分からなる構成方法も同じである。いずれも僧院の本尊と考えられ、Khadipada にも仏教僧院が存在したことが予想される。

4 (1) Buddha

(2) Ratnagiri

(3) Stone, 74cm, 9c (Mus)

(4) Bénisti 1981：Fig. 162 **[図8]**

(5)触地印。如来形。結跏趺坐。光背上部左右に飛天。台座に蓮華、帰依者、供物の浮彫。頭部表面磨滅。Bénisti は右手の印相を与願印と見て、宝生に比定する(1981：132)。同じように、飛天をともない、台座に帰依者と供物の浮彫のある単独の触地印仏坐像は、ラトナギリから数例出土している（Mitra 1981：Pls. CXXX（C)、CCCXXⅨ（B)、CCCLⅢ（A）；佐和 1982：46図など)。ラトナギリ出土の与願印仏坐像は、奉献塔の龕中の浮彫を除いて2例あるが、1例（Mitra 1981：Pl. LXXXVI（A)）は飛天、帰依者、供物の浮彫がない。もう1例（Mitra 1981：Pl. CLXIX（D)）は飛天、帰依者の他に、光背上部中央に樹木のモティーフ（おそらく菩提樹)、台座左右に獅子の浮彫もある。

5 (1) Buddha

(2) Narasingpur, Cuttack

(3) Stone, 168cm

(4) **[図9]**

(5)触地印？。如来形。結跏趺坐。光背の上部は三葉龕。光背左右に象と有翼の動物の浮彫。台座に帰依者、人物群の浮彫。表面の磨滅がかなりはげしく、右手首も欠損。赤褐色の石材を用いる。出土地の Narasingpur はカタック地区の内陸部で、マハーナディー川の流域に位置する。光背左右に有翼の動物を表現した作例はラトナギリから3例出土している(Mitra 1981：Pls. CXXXVI(A)、CCCXXIV(A)；Bénisti 1981：Fig. 167；Mitra 1983：Pl. CCCXXV（A）；佐和 1982：71図)。ただし、いずれも有翼の動物に騎乗する人物も表現されている。また、光背の中央に樹木のモティーフ、光背中段には宝をくわえた水鳥（1例では脇侍菩薩)、台座左右には獅子が現れるなどの相違点も認められる。

6 (1) Buddha

(2) Khaira, Bhadacana

(3) Stone, 9c (Mus)

(4) **[図10]**

(5)触地印？。如来形。結跏趺坐。偏袒右肩。光背上部左右に飛天。Khaira はカタック地区の北の Baleshwar 地区のほぼ中央に位置する町。ここから後出のクベーラ像（本稿作品番号**28**）も出土している。

7 (1) Buddha

(2) Khiching

(3) Stone, 8c (Mus)

(4) **[図11]**

(5)触地印。如来形。結跏趺坐。偏袒右肩。光背上部左右に飛天。台座に獅子と帰依者。独特の丸みを帯びた作風は、同じ Khiching 出土の八大菩薩をともなう触地印如来坐像（佐和 1982：挿絵99；頼富 1990：図14）にも共通してみられる。頭上の樹木の表現方法も共通する。Khiching からは、様式がかなり異なる触地印仏坐像がもう一例出土している（Sahu 1958：Fig. 69）。

8 (1) Buddha

(2) Nathmara, Cuttack

(3) Stone, 8c(Mus)

(4) **[図12]**

(5)定印。如来形。結跏趺坐。オリッサからの定印仏坐像の作例は20例あまり知られている（このうち、5例は奉献塔の龕中の浮彫）。この作例と同様、光背や台座に特別の装飾がない作例は1例（Mitra 1983：Pl. CCLIV（B））に限られる。

9 (1) Buddha

(2) Udayagiri

(3) Stone

(4) Sahu 1958：Fig. 72 **[図13]**

(5)定印。如来形。結跏趺坐。蛇の光背と傘蓋。頭部欠損。台座中央に法輪、左右に獅子の浮彫。奥行きのない平板な作りで、厚みは30㎝程度しかない。博物館の表示は「不空成就」（Amoghasiddhi）である。おそらく、蛇のモティーフの光背と傘蓋が比定の根拠であろう。台座の法輪から「釈迦」と見るべきかもしれない。台座に法輪を表現した定印仏坐像はラリタギリから2例出土している（現地収蔵庫所蔵、図版未発表）。また、蛇のモティーフの光背を持つ定印仏坐像もラリタギリに3例ある（図版未発表）。ただし、蛇の光背と台座の法輪の両者を含む作例は、これ以外に知られていない。定印以外の印相で、台座に法輪が表された作品は、転法輪印坐像が5例、施無畏印坐像が7例ある（図版は前者が Mitra 1981：Pl. CXXXIX；Bénisti 1981：Fig. 168；宮治 1995：図11；Mitra 1981：Pl. CLXXXIII（D）、このほかラリタギリ収蔵庫の2例は図版未発表、後者は佐和 1982：92図が発表されるのみで、他の6例はいずれもラリタギリ収蔵庫の未発表作品）。ウダヤギリ出土の定印仏坐像は、ストゥーパの西龕に置かれた、脇侍菩薩をともなう阿弥陀坐像（佐和 1982：挿図40、136図；頼富 1983b：図10、1990図36、1992a：図4；頼富・下泉 1994：70）、パトナ博物館所蔵の、やはり脇侍菩薩をともなう坐像（佐和 1982：139図）、光背に八大菩薩をともなう坐像（佐和 1982：挿図97、133図；頼富 1990：図70）の3例がある。

10　(1) Buddha（Ratnasambhava?）

(2) Bihar

(3) Stone

(4) **[図1，14]**

(5)与願印。如来形。結跏趺坐。頭部欠損。光背左右にピラーの浮彫。台座は上下2段に分かれ、上段には蔓草文様の中に七宝（向かって左より、剣（＝主兵宝？）、象宝、馬宝、輪宝、居士宝、王女宝、神珠宝）、下段は5人の帰依者、供物、菩薩坐像（金剛薩埵？）の浮彫がある **[図14]**。菩薩は渦巻型の髪形で、右手に金剛杵、左手に金剛鈴を持つ。ビハール、ベンガル地方から出土した、宝生に比定しうる作例は3例にとどまる（宮治 1993：48、60）。この中で、ダッカ地方から出土した作例には、台座にやはり七宝が表現されているが、この作品とは様式がかなり異なる。オリッサから出土した与願印仏坐像も少なく、ラトナギリから2例（Mitra 1981：Pls. LXXXVI（A）、CLXIX（D））、ラリタギリから1例（図版未発表）、ウダヤギリから2例（頼富 1992a：図3、1例は図版未発表）を数えるにすぎない。台座に七宝を表現した作品は多いが、カルカッタのインド博物館所蔵のカサルパナ観音坐像（Sahu 1958：Fig. 38；Bénisti 1981：Fig. 153；佐和 1982：70図）には、この作品によく似た方法で七宝が表されている。

11　(1) Votive stupa

(2) Bihar

(3) Stone

(4) **[図15～18]**

(5)四方の龕に仏坐像の浮彫がある。いずれも如来形で、通肩。印相は左回りに転法輪印（あるいは合掌）**[図15]**、転法輪印 **[図16]**、触地印 **[図17]**、鉢を載せた定印 **[図18]**。下段の基壇部にもやや小さめの龕があり、同様に未比定立像、誕生図、涅槃図、欠損。仏龕の周囲は定印の仏坐像によって埋められる。仏塔の周囲の尊像に関しては頼富（1985）にまとめられているが、この作例に一致する組み合わせは紹介されていない。

観音

12　(1) Avalokiteśvara

(2) Bhuvaneswar；Orissa State Museum

(3) Black Stone, 131cm, 11c (Mus)

(4) Sahu 1958：Fig. 75 **[図2，19～22]**

(5)立像。頭部および両腕欠損。首飾り、腕釧、腰飾り、聖紐、条帛、足首飾り。体の左に蓮華の茎が残る。右脇侍ターラー（Tārā、未敷蓮華を開くしぐさ）**[図20]**、左脇侍ブリクティー（Bhṛkuṭī、四臂。右手数珠、左手水瓶、その他は不明。頭部欠損）**[図21]**。さらにその外側に斧を持った小さな人物 **[図22]**。台座に人物群。一般にスーチームカ（Sūcīmukha）がとる、両手を上にあげたポーズを6人の人物が示す。オリッサ出土の二臂観音立像で、脇侍女尊をともなう作例はラリタギリ（佐和 1982：101図）、アヨードヤー（Sahu 1958：Fig. 66）、ラトナギリ（佐和 1982：61図）からそれぞれ1例ずつ出土している。このうちラリタギリの作品は脇侍女尊は坐像であるが、ターラーはやはり未敷蓮華を開くしぐさを示す。このほかの観音で、未敷蓮華を開くしぐさを示すターラーをともなう作品は、二臂観音坐像に3例（Kramrisch 1960：Pl. 12；Sahu 1958：Fig. 38；Bénisti 1981：Fig. 153；佐和 1982：70図；Sahu 1958：Fig. 61）、四臂観音坐像に2例（Mitra 1981：Pl. XCⅢ（B）；佐和 1982：47図；Mitra 1983：Pl. CCCXXXI（A））、四臂観音坐像には7例（Mitra 1983：Pls. CCCXXXIV（C）、CCCXXXV（A）；Panigrahi 1957：Fig. Ⅰ；Sahu 1958：Fig. 15；佐和 1982：143図；Saraswati 1977：Pl. 65；Sahu 1958：Figs. 17, 18；佐和 1982：口絵16、131図；Mallmann 1948：Pl. VI；佐和 1982：137図、140図、1例は図版未発表）確認できる。パーラ朝の版図で制作されたと考えられる観音で、ターラーとブリクティーをともなう作例は多数知られているが、未敷蓮華を開くしぐさのターラーは現れない。蓮華を左手に持ち、右手は与願印か施無畏印、あるいは、両手で合掌するという3つのタイプに限られる。

13 (1) Avalokiteśvara

(2) Cuttack

(3) Stone, 12c(Mus)

(4) **[図23～25]**

(5)四臂立像。右前手、与願印、後手、数珠、左前手、水瓶、後手、蓮華。髪髻冠。耳飾り、首飾り、聖紐。左脇侍左より、ハヤグリーヴァ（斧の上に両手を置く）、ブリクティー（四臂で右後手を上に掲げる）**[図24]**、右脇侍向かって左よりスダナクマーラ（合掌する？）、ターラー **[図25]**。光背上部左右に飛天。表面の磨滅が著しい。胸のあたりで水平に亀裂が入る。オリッサ出土の観音で、ターラーなどの四脇侍がそろって現れる作品は4例ある（Mitra 1983：Pl. CCCXXXI（B）；佐和 1982：34図；Kramrisch 1960：Pl, 12；Sahu 1958：Fig. 66、残り1例は本稿作品番号**14**）。四臂観音の作例はオリッサでは豊富で、坐像に16例、立像に15

例が確認できる。

14 (1) Avalokiteśvara

(2) Dharmasala

(3) Stone, 109cm, 11c(Mus)

(4) **[図26]**

(5)六臂立像。右手数珠、左手蓮華、水瓶？。それ以外の持物不明。左脇侍左より、スダナクマーラ？、ブリクティー（四臂で蓮華と水瓶を持つ）、右脇侍向かって左よりハヤグリーヴァ（両手を胸の前に置く）、ターラー（右手与願印、左手蓮華）。光背上部向かって左に飛天。台座左右に合掌する帰依者。表面の磨滅が著しい。オリッサからは本例以外の六臂観音の作例は知られていない。パーラ朝の版図からの六臂観音の作例は15例を数え、四脇侍をともなう作品も２例ある（Bautze-Picron 1991/1992：Fig. 31 ; Saraswati 1977：Pl. 74）。ただし、両作品とも光背上部に五仏を配置する。

15 (1) Khasarpaṇa Avalokiteśvara

(2) Vajragiri

(3) Stone, 174cm, 12c (Mus)

(4) **[図27]**

(5)二臂坐像。右手与願印、左手蓮華。体の右側にも同じような蓮華が伸びる。円錐形の髪髻冠。三面頭飾、耳飾り、首飾り、臂釧、腕釧、ドーティ、足首飾り。頭部右下半分、向かって右の蓮華、右手は後補。光背にも補修が多い。光背上部、山岳表現の中に五仏。ただし向かって左端は欠損。四仏の印相は向かって左より与願印、定印、施無畏印、転法輪印。右脇侍スダナクマーラ、左脇侍ハヤグリーヴァ。台座にスーチームカと４人の帰依者（このうち２人はブリクティーとターラーか？）。オリッサから出土した類似の山岳表現を含むカサルパナ観音は、次の作例を除き、カルカッタのインド博物館が２例所蔵する（Sahu 1958：Fig. 61、もう１例は本稿作品番号**10**ですでに言及）。また、ビハールのクルキハールからも山岳の中に五仏を表現した観音坐像が出土している（Mallmann 1948：Pl. XIV (b) ; Saraswati 1977：Pl. 83 ; Kramrisch 1983：Pl. 11-42 ; 佐久間 1991：図５～８）。この作品では山の中に聖仙や動物たちも表されている。いずれの作品も補陀落山を表現したものであろう。

16 (1) Avalokiteśvara

(2) Baneswaranasi, Cuttack

(3) Stone, 160cm

(4) Sahu 1958：Fig. 57 ; 佐久間 1991：A-S1-M1-Ⅱ-17 **[図28]**

(5)遊戯坐。右手、与願印。左手、蓮華。髪髻冠。右脇侍ターラー（合掌する）、左脇侍ブリクティー（左手に水瓶を持つ）。いずれも小蓮台の上に立つ。台座にハヤグリーヴァ（斧の上に手を置いて坐る）と3人の帰依者。光背は山岳表現。光背上部に五仏が一列に並ぶ。印相は向かって左から（不明）、与願印、定印、触地印、転法輪印。作品全体の表面はかなり磨滅している。光背の上部に仏坐像が一列に並ぶ作品は、オリッサから3例出土している（Saraswati 1977：Pl. 65；Sahu 1958：Figs. 17、18；佐和 1982：口絵16、131図；Mallmann 1948：Pl. VI；佐和 1982：137図）。いずれも四臂観音立像で、すべて出土地はウダヤギリである。また、これらの作品は五仏ではなく、2例では9体の仏坐像が、残りの1例では7体が1列に並ぶ。ベンガル、ビハール地方では光背に五仏を配するカサルパナ観音の作例が豊富で、坐像、立像あわせて30例以上にのぼるが、いずれも五仏は光背の周囲に沿って、山形に配されている。

蓮華手

17 (1) Padmapāṇi

(2) Khadipada, Barasore

(3) Stone, 130×37cm

(4) Sahu 1958：Fig. 50；佐久間 1991：A-X-Ⅰ-17 **[図29]**

(5)立像。丸い髪型。頭飾、耳飾り、首飾り、聖紐、条帛、臂釧、腕釧。右腕欠損。頭部表面磨滅。右足も一部欠損。左手は、大地から伸びる蓮華の茎を持つ。光背向かって右側面に銘文。おそらく次の金剛手と一対の作品。オリッサの仏教僧院では、蓮華手と金剛手が対となった立像の作品が何組か出土している（Cf. 頼富 1991a：47-49）。よく知られたものとしてはラトナギリ第1僧院の触地印仏坐像脇侍（図版は蓮華手が Mitra 1981：Pl. CXXVII(B)；佐和 1982：挿絵79；14図；頼富 1991a：図11、金剛手が Saraswati 1977：Pl. 165；Bénisti 1981：Fig. 164；佐和 1982：挿図81、図15；頼富 1991：図12）と入口左右の四臂立像（蓮華手が Saraswati 1977：Pl. 63；Mitra 1981：Pl. CIX（B）；佐和 1982：口絵8、挿図80、7図；頼富 1991a：図11、金剛手が Saraswati 1977：Pl. 164；Mitra 1981：Pl. CIX（A）；佐和 1982：挿図82、図10）がある。本作品も法量、様式とも共通する、同じ Khadipadā 出土の次の金剛手と一対となる作品であろう。欠損した右手には、ラトナギリの脇侍菩薩と同様に払子が握られていたかもしれない。脇侍を単独の作品とせず、本尊の脇に小さく表現する碑像形式の三尊像で、蓮華手と金剛手を脇侍とする作品もオリッサからは多く出土している（Saraswati 1977：

Pl. 195 ; Bénisti 1981：Fig. 166 ; Mitra 1981：Pl. CXXXVI（B） ; 佐和 1982：口絵 6、20図 ; Saraswati 1977：Pl. 195 ; Mitra 1981：Pl. CXXXVII（B） ; 佐和 1982：21図 ; Mitra 1981：Pl. CCCXXIV（A） ; 佐和 1982：112図)。これら二菩薩を脇侍とする伝統は、これまでにも指摘されてきたように、おそらく西インドの石窟寺院の流れを汲むものであろうが（頼富 1982：38-43 ; 石黒 1985：189)、パーラ朝では如来像の脇侍には圧倒的に観音と弥勒の組み合わせが多かったことと著しい対比を示している（宮治 1993：23-29、32)。ただし、ビハール地方からも蓮華手と金剛手を脇侍とする作例が１例あり（パトナ博物館所蔵、図版未発表)、この形式がまったく知られていなかったわけではない。

金剛手

18 (1) Vajrapāṇi

(2) Khadipada, Barasore

(3) Stone ; 137×57cm

(4) **[図30]**

(5)立像。頭部、両腕、光背向かって右上欠損。首飾り、聖紐、条帛、臂釧、腕釧、ドーティを身に付ける。右手持物不明、左手はおそらく睡蓮の茎を持つ。睡蓮は大地から伸び、花の上に水平に金剛杵を載せる。おそらく上記の作品番号**17**の蓮華手と一対の作品。博物館の表示は「観音」（Avalokiteśvara）であるが、「金剛手」の誤りであろう。

19 (1) Vajrapāṇi

(2) Vajragiri

(3) Stone, 139cm

(4) **[図３，31～34]**

(5)四臂立像。髪は一つに束ね、垂髪が肩に掛かる。頭飾、耳飾り、首飾り、聖紐、臂釧。腕釧、ドーティ。右前手は肘から先が欠損しているが、おそらく払子を持つ。右後手は台地から伸びた睡蓮を持つ。花の上には金剛杵を水平に載せる。左前手は脇侍の頭の上に置く。左後手は直方体の何か（梵夾？）を持つ。光背上部左右に飛天 **[図32]**。左脇侍は左ひざを立てて坐る女尊。右手は胸の前に置き、直立した金剛杵を持つ **[図33]**。向かって右には四臂の男性像。主要な二臂で胸の前で合掌し、右後手は期剋印？、左後手は剣を持つ **[図34]**。炎髪。蛇の装身具。短ドーティをまとい、主尊の方を見上げる。博物館の表示は「金剛手観音」（Vajrapāṇi Avalokiteśvara)。オリッサではこの作品の他にラトナギリから四臂

の金剛手立像が出土している（本稿作品番号17においてすでに言及）。ラトナギリの作例では、印と持物が右前手、与願印、右後手、数珠、左前手、水瓶、左後手、水平に金剛杵をのせた睡蓮で、この作例とは金剛杵をのせた睡蓮以外は一致しない。また、右脇侍も女尊ではなく、やせた男性像が置かれている。うずくまる女性脇侍は、インド博物館所蔵の二臂金剛手立像（Sahu 1958 ; Figs. 36, 41 ; 佐和 1982：挿図 12 ; 岩宮 1989：図213 ; 頼富 1990：図73）やラリタギリ現地収蔵庫の同じく二臂立像（佐和 1982：挿図123）にも見られるが、いずれも手に金剛杵は持っていない。これらを含め、オリッサから出土した金剛手の作例は立像7例、坐像3例が知られている。10例の中で、このヴァジュラギリの四臂金剛手立像に固有の特徴として、金剛杵を持つ脇侍女尊の他に頭部の装飾があげられる。この作品では髪は全体が大きく一つにまとめられ、垂髪も表現されている**[図32]**。これに対し、他の9例ではいずれも円筒形の宝冠をいただく。右脇侍女尊が持つ直立した金剛杵はオリッサではこのほか、ウダヤギリ出土の金剛手坐像（図版未発表）にも見られるが、パーラ朝の金剛手の持物としては、むしろ一般的である（たとえばBanerji 1933：Pl. XXXVII（a）; Saraswati 1977：Pl. 166 ; Raven & van Kooij 1986：Fig. 52）。

文殊

20 (1) Mañjuśrī

(2) Vajragiri

(3) Stone, 108cm, 8c (Mus)

(4)森 1996：No. 54, 図4 **[図35]**

(5)遊戯坐。右手、与願印、左手、梵夾を載せた睡蓮。三髻？。三山頭飾、丸い耳飾り、首飾り、臂釧、腕釧、聖紐、足首飾り。光背上部左右に飛天。鼻梁部後補。台座左右に獅子と象の浮彫。台座向かって右下に供養者。オリッサのカタック地区から出土した類似の文殊坐像は7例ある（森 1996：Nos. 50-56）。

21 (1) Mañjuvara

(2) Vajragiri

(3) Stone, 52×65cm, 8c (Mus)

(4)森 1996：No. 26, 図3 **[図36]**

(5)転法輪印。腰より下の部分欠損。梵夾を載せた睡蓮が左手から伸びる。三髻？。三山頭飾、丸い耳飾り、首飾り、臂釧、腕釧。左右に立像の二脇侍。光背上部左右に二飛天。

22　(1) Mañjuśrī？

(2) Bhubaneswar

(3) Stone, 124×91×55cm

(4)森 1996：No. 74, 図 7　**[図37]**

(5)右膝をたてて坐る。頭部、両腕、左膝の一部欠損。右手は胸の前に置く？。首飾り、臂釧、聖紐。

女尊

23　(1) Tārā

(2) Bhuvaneswar

(3) Stone, 150×82cm, 10c(Mus)

(4) **[図38]**

(5)遊戯坐。右手与願印、左手睡蓮。平らな髪型。頭飾、耳飾り、首飾り、臂釧、腕釧、聖紐、条帛。最も一般的なターラーの特徴を示す。オリッサからは右手与願印で、左手で睡蓮を持ち、遊戯坐で坐るこのタイプのターラーが50例近く出土している（奉献塔の龕中の浮彫を除く）。

24　(1) Tārā

(2) Mangarpur, Puri Dt.

(3) Stone, 128cm, 10c(Mus)

(4) **[図 4，39]**

(5)結跏趺坐。両腕欠損。髪髻冠。頭飾、冠帯、耳飾り、首飾り、臂釧、聖紐。光背上部に五仏坐像。五仏の間に 4 人の女性立像。このうち下の 2 人は花輪を持つ。上の 2 人の持物は不明。光背上部左右に飛天。台座は上下 2 段に分かれ、上段には七宝、下段には帰依者と供物の浮彫、さらに向かって右端に金剛薩埵と思われる坐像 **[図39]**。台座の表現は、すでに取り上げた与願印仏坐像（本稿作品番号 **10 [図14]**）によく似ている。結跏趺坐で坐るターラーはオリッサからはこれ以外に 3 例出土している。このうち、ラトナギリ出土の作例（Sahu 1958：Pl. 62；Ghosh 1980：Ill. 19；Mitra 1983：Pl. CCCXXXVII（A）；佐和 1982：24図）にも、配置は若干異なるが、やはり五仏坐像と 4 人の女性立像が表現されている。その他の 2 作品（Ghosh 1980：Ill. 18；Mitra 1981：Pl. XCVI（A）；Mitra 1978：Pl. 101；Gosh 1980：Ill. 21）は、いずれも単独像である。パーラ朝の版図からは 9 例あるが、図像的な特徴が一致する作品はない。

25 (1) Tārā？

(2)

(3) Stone, 150×82cm, 6c (Mus)

(4) **[図40]**

(5)遊戯坐。四臂。頭部および両腕すべて欠損。右前手は与願印？、左後手で器？を持つ。首飾り、臂釧、腕釧、聖紐。台座に帰依者と2体の立像。四臂のターラーはラリタギリから坐像が1例（Sahu 1958：Pl. 38；Ghosh 1980：Ill. 24；森喜子 1991：2．7．3．1，図8）、ラトナギリから立像が1例（Ghosh 1980：Ill. 25；Mitra 1983：Pl. CCLII；森喜子 1991：2．7．3．2）出土している。本作品は持物、光背の損傷が多く、尊像比定の明確な根拠を見いだし得ない。

26 (1) Cuṇḍā

(2) Bhuvaneswar

(3) Stone, 7c (Mus)

(4) **[図41]**

(5)八臂。結跏趺坐。臂釧、腕釧。主要な二臂は定印。右手、与願印、（その他不明）、左手、梵夾、（その他不明）。丸い髪型。頭飾、耳飾り、首飾り、臂釧、腕釧。台座向かって右端にやや大きく女性坐像。台座に帰依者と供物。光背上部欠損。オリッサ出土のチュンダーはほとんどが四臂で、それよりも多い臂を持つ作例はパトナ博物館の十二臂像（Sraswati 1977：Pl. 138；頼富・下泉 1984：p. 202）とウダヤギリの現地のヒンドゥー祠堂にある八？臂像（図版未発表、佐和 1982：p. 38において言及）、ラトナギリの奉献塔の龕中の浮彫の六？臂像（Bénisti 1981：Fig. 125）が確認できる程度である。

27 (1) Unidentified Goddess

(2)

(3) Stone, 61cm, 8c (Mus)

(4) **[図42]**

(5)四臂？。結跏趺坐。首飾り、臂釧、腕釧。頭部、右腕欠損。持物不明。向かって右下の装飾モティーフから全体は円形のパネルであったことが予想される。四臂をそなえ、結跏趺坐で坐ることから、チュンダーと比定すべきかもしれないが、一般にチュンダーは主要な二臂で定印を結ぶ。この作例では正確な臂数は不明であるが、主要な二臂は体の左右に置かれ、定印を示していない。

クベーラ

28　(1) Kubera

(2) Khaira

(3) Stone, 9c (Mus)

(4) **[図43]**

(5)遊戯坐。右手与願印に宝？、左手不明。髪髻冠。耳飾り、首飾り、腕釧。台座に５個の壺の浮彫。光背上部左右にも壺の浮彫。クベーラ、あるいはジャンバラに比定される財宝神の作例は、オリッサでは豊富である。オリッサの財宝神については頼富（1991b）がくわしい。拙稿（1990）においてもあつかった。本作例は拙稿のリストには含まれていない。

ヤクシャとヤクシニー

29　(1) Yakṣa, Yakṣiṇī

(2) Bhuvaneswar

(3) Stone, 40×82cm, 7c(Mus)

(4) **[図44]**

(5)横長のパネルの中心部にヤクシャ（向かって左）、ヤクシニー（右）を描き、さらにその外側に払子を持つ女性侍者（左）、剣を持つ侍者（右）を置く。パネルの右端には巨大な頭の異形の人物を装飾的に表現する。ヤクシャとヤクシニーは片膝をたてて坐り、食事か酒盛りをしている様子。いずれもさまざまな装身具を身につける。侍者は立っている。向かって左の侍者のさらに外側にもう１人立っている人物がいるが、左半身が残存するのみ。全体は建造物の一部？。

付記

本稿は1995年３月15日と1996年１月12日の２回にわたるオリッサ州立博物館での調査にもとづく。調査に当たっては同館の管理部長 B. Samal 博士に便宜をはかっていただき、さらに写真発表の許可もいただいた。深く感謝いたします。なお本稿は平成８年度文部省科学研究費補助金による基盤研究（C）(2)「オリッサ州カタック地区の密教図像の研究」（課題番号08610026）による研究成果の一部である。

引用文献

石黒　淳　1985　「金剛手の系譜」『密教美術大観　第三巻』　朝日新聞社、pp. 181-191。

岩宮武二　1989　『アジアの仏像（上）』集英社。

佐久間留理子　1991　「パーラ朝における観自在菩薩の図像的特徴(1)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』　7：109-148。

佐和隆研（編）　1982　『密教美術の原像』　法蔵館。

宮治　昭（代表）　1993　『インドのパーラ朝美術の図像学的研究』（平成３・４年度科学研究費補助金研究成果報告書）。

宮治　昭　1995　「インドの大日如来の現存作例について」『密教図像』14：1-30。

森　雅秀　1990　「パーラ朝の守護尊・護法尊・財宝神の図像的特徴」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』　6：69-111。

森　雅秀　1996　「パーラ朝の文殊の図像学的特徴」『高野山大学論叢』31：55-98。

森　喜子　1991　「パーラ朝の女尊の図像的特徴(2)」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』　7：155-192。

頼富本宏　1982　「金剛薩埵図像覚え書き（上）」『密教図像』１：30-45。

頼富本宏　1983　「密教美術の源流」『密教美術大観　第一巻』　朝日新聞社、pp. 182-195。

頼富本宏　1985　「仏塔周囲の四尊像について」『密教文化』　150：107-125。

頼富本宏　1990　『密教仏の研究』　法蔵館。

頼富本宏　1991a　「中インド・シルプル遺跡の仏教美術」『仏教芸術』　191：40-57。

頼富本宏　1991b　「インド現存の財宝尊系男女尊像」『井原照蓮博士古稀記念論文集』　九州大学印度哲学研究室、pp. 267-299。

頼富本宏　1992a　「インド現存の金胎融合要素」『密教学研究』　24：11-30。

頼富本宏　1992b　「東インド・オリッサ州所在ウダヤギリ遺跡の新発掘」『仏教万華　種智院大学学舎竣工記念論文集』（種智院大学学舎竣工記念論文集刊行会編）永田文昌堂、pp. 107-127。

頼富本宏・下泉全暁　1994　『密教仏像図典－インドと日本のほとけたち』　人文書院。

Banerji, R. D. 1933 *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture.* Archaeological Survey of India, New Imperial Series, XLVII. Delhi : Manager of Publications.

Bautze-Picron, C. 1991/1992 Lakhi Sarai. An Indian Site of Late Buddhist Iconography, and Its Position within the Asian Buddhist World. *Silk Road Art and Archaeology* 2 : 239-273.

Bénisti, M. 1981 *Contribution à l'étude du stūpa bouddhique indien : les stūpa mineurs de Bodh-Gayā de et de Ratnagiri.* Publication de l'École Français d'Extrême-Orient Vol. 125. Paris : École Français d'Extrême-Orient.

Bhattasali, N. K. 1929 *Iconography of Buddhist and Brahmanical Sculpture in the Dacca Museum.* Dacca : Dacca Museum Committee.

Ghosh, M. 1980 *Development of Buddhist Iconography in Eastern India : A Study of Tārā, Prajñā of Five Tathāgatas and Bhṛkuṭī.* New Delhi : Mushiram Manoharlal Publishers.

Huntington, S. L. 1984 *The "Pāla-Sena" Schools of Sculpture.* Studies in South Asian Culture Vol. X. Leiden : E. J. Brill.

Huntington, S. L. 1985 *The Art of Ancient India.* Tokyo : John Weatherhill Inc..

Huntington, S. L. & J. C. Huntington 1990 *Leaves from the Bodhi Tree : The Art of Pala India (8th-12th Centuries) and Its International Legacy.* Seattle :The Dayton Art Institute.

Kramrisch, S. 1983 *Exploring India's Sacred Art : Selected Writings of Stella Kramrisch.* Philadelphia : University of Pennsylvania Press.

Mallmann, M.-T. de 1948 *Introduction a l'étude d'Avalokiteśvara.* Paris : École Française d'Extrême-Orient.

Mitra, D. 1978 *Bronzes from Achutrajpur, Orissa.* Delhi : Agam Kala Prakashan.

Mitra, D. 1981 *Ratnagiri (1958-61).* Vol. I. Memories of the Archaeological Survey of India, No. 80. New Delhi : Archaeological Survey of India.

Mitra, D. 1983 *Ratnagiri (1958-61).* Vol. II. Memories of the Archaeological Survey of India, No. 80. New Delhi : Archaeological Survey of India.

Raven, E. M. & van Kooij, K. R. 1986 Pāla-Sena Stone Sculptures from the National Museum of Ethnology, Leiden. *Berliner Indologische Studien* 2 : 94-128.

Sahu, N. K. 1958 *Buddhism in Orissa.* Cuttak : Utkal University.

Saraswati, S. K. 1977 *Tantrayāna Art : An Album.* Calcutta : Asiatic Society.

〈キーワード〉オリッサ州立博物館、密教美術、カタック

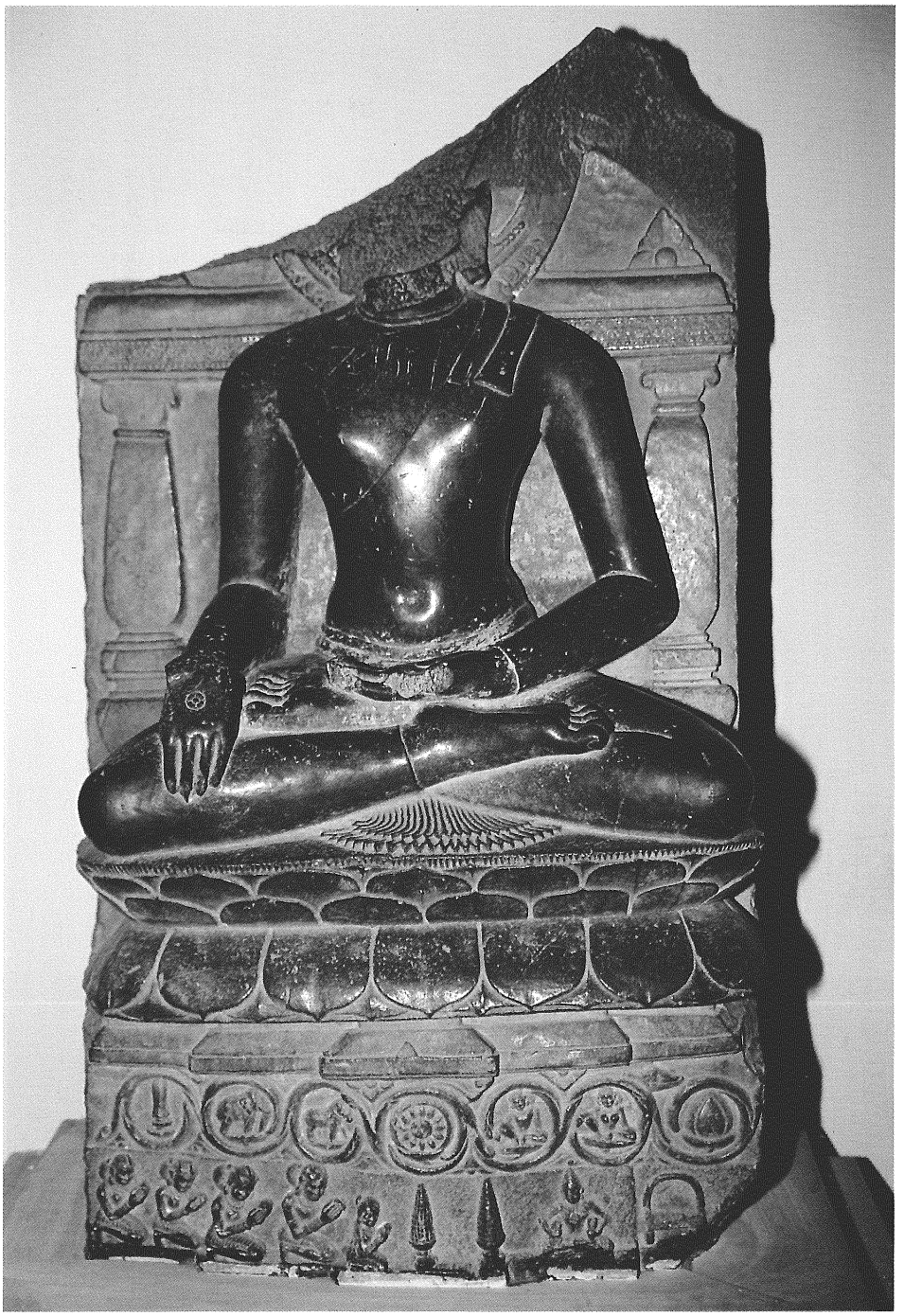


図１　与願印仏坐像

図２　二女尊脇侍をともなう観音立像

図３　二脇侍をともなう四臂金剛手立像

図４　ターラー坐像

図６　脇侍菩薩をともなう転法輪印宝冠仏坐像

図５　転法輪印宝冠仏坐像

図 8　触地印仏坐像（Ratnagiri 出土）

図 7　触地印仏坐像（Khadipada 出土）

図10　触地印仏坐像（Khaira 出土）

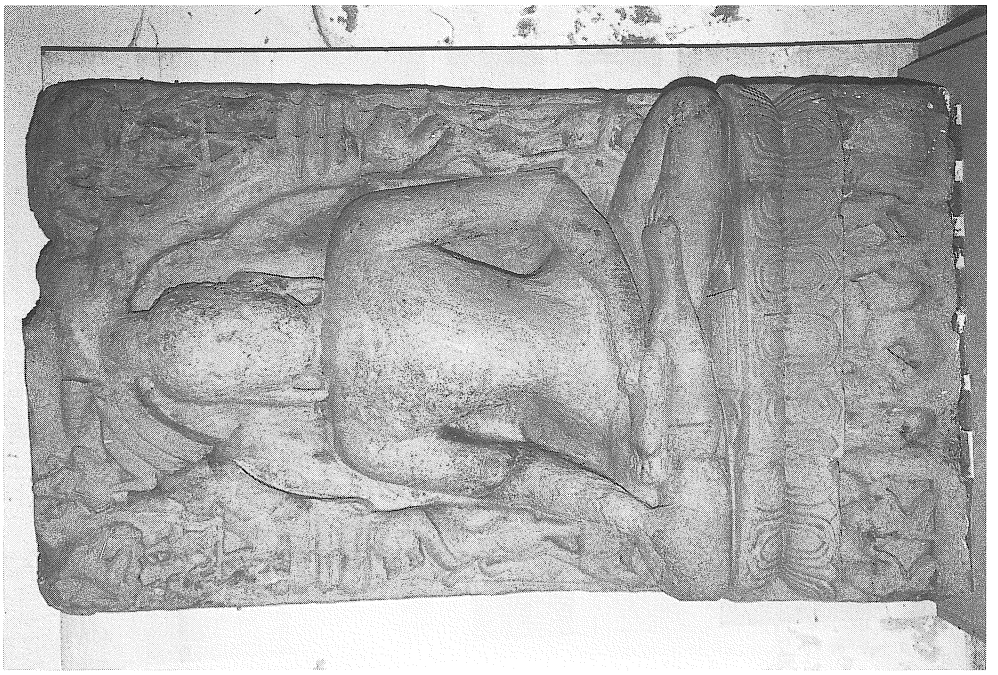


図 9　触地印仏坐像（Narasingpur 出土）

図12　定印仏坐像（Nathmara 出土）

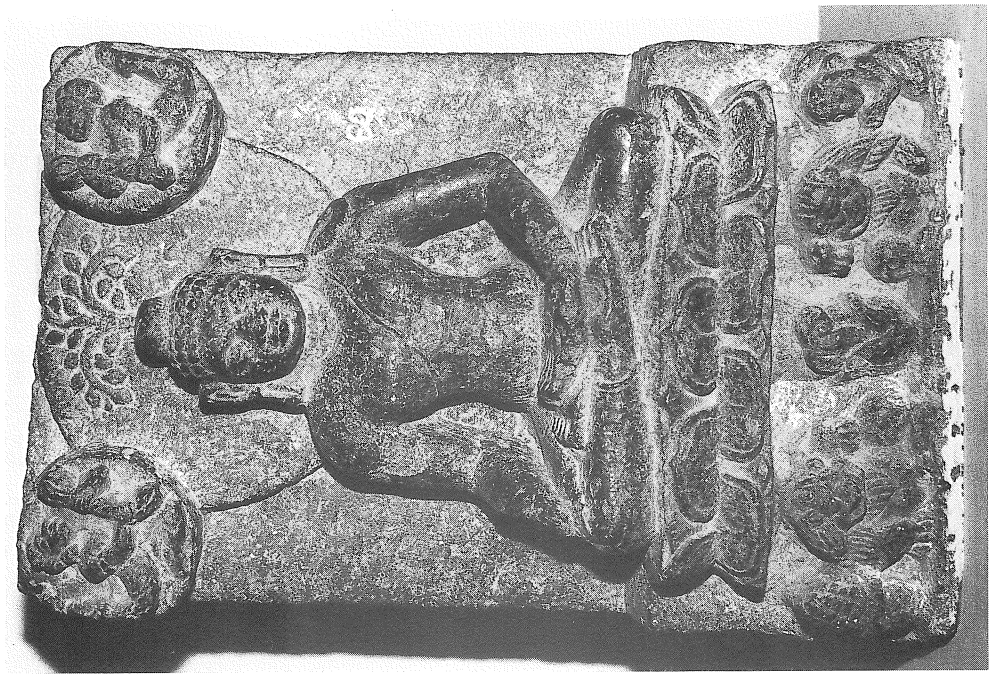


図11　触地印仏坐像（Khiching 出土）

図14　図１部分（台座）

図13　定印仏坐像（Udayagiri 出土）

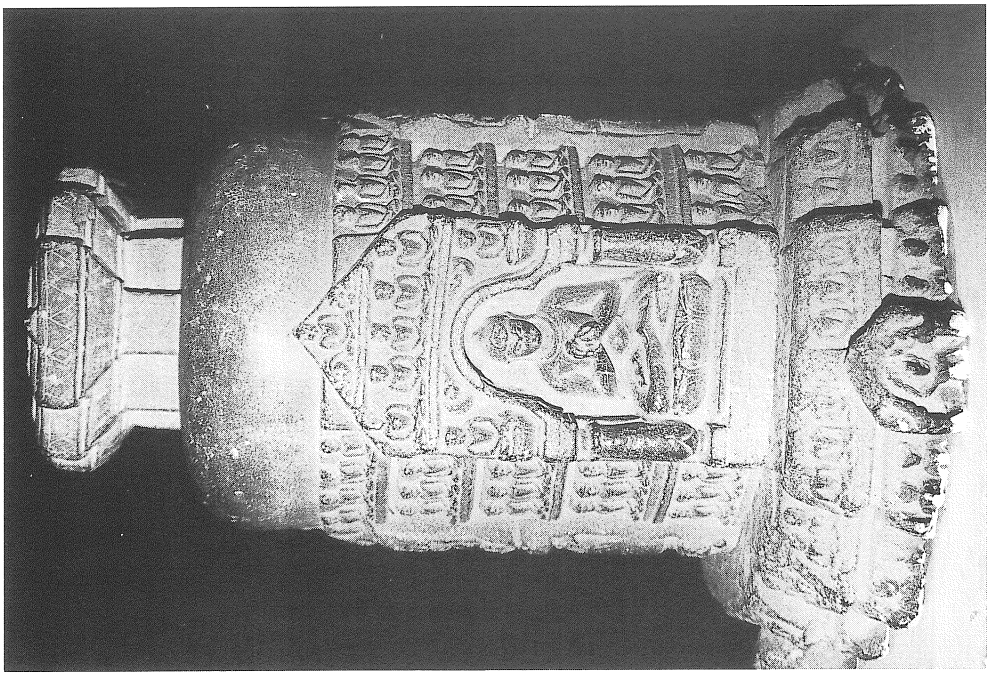


図16　奉献塔（転法輪印仏坐像と誕生図）

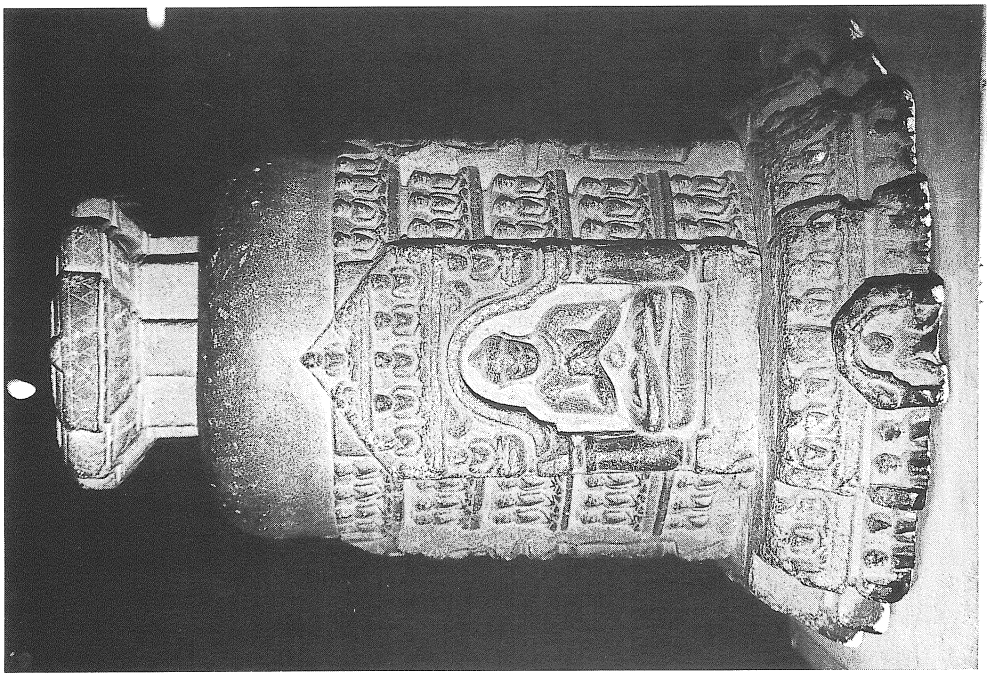


図15　奉献塔（転法輪印仏坐像と未比定立像）

図18　奉献塔（定印仏坐像と涅槃図）

図17　奉献塔（触地印仏坐像）

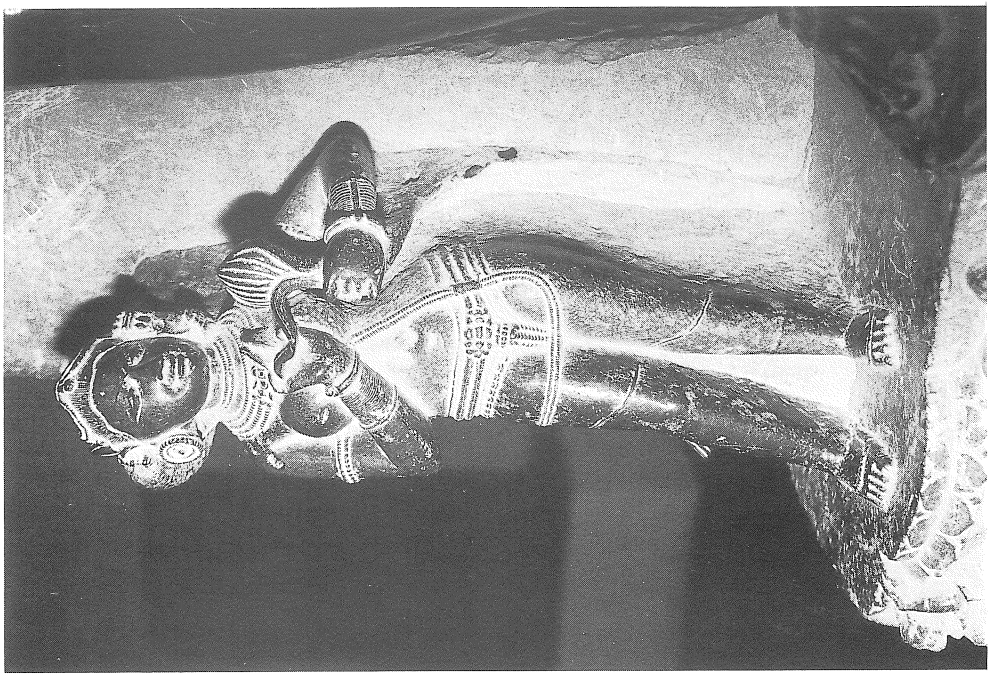


図20　図２部分（右脇侍のターラー）

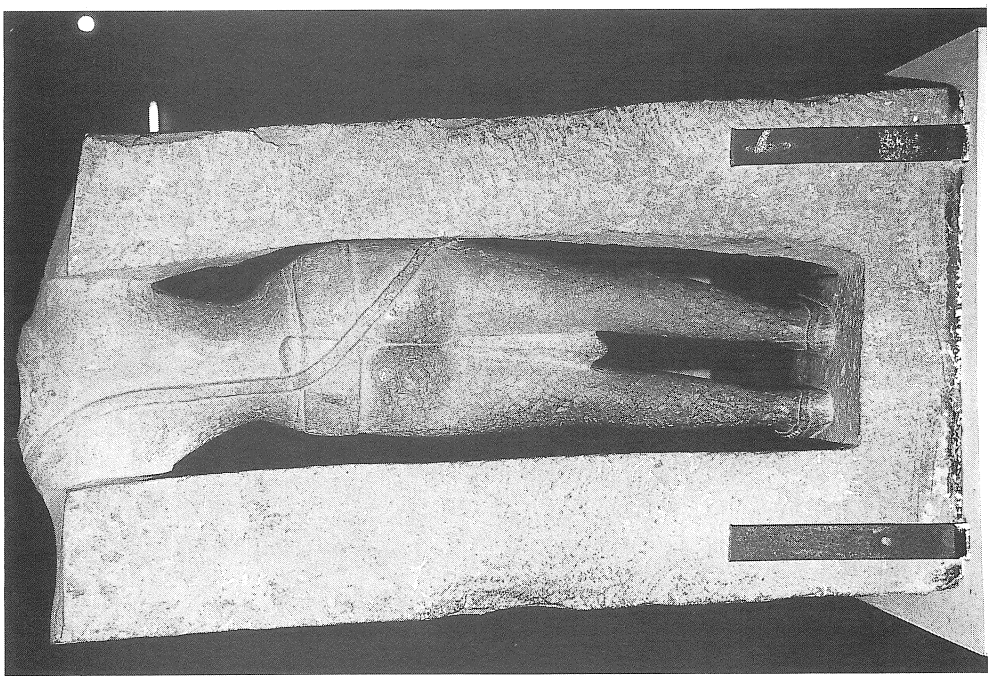


図19　二女尊脇侍をともなう観音立像（図２）背面

図22　図２部分（斧を持った人物）

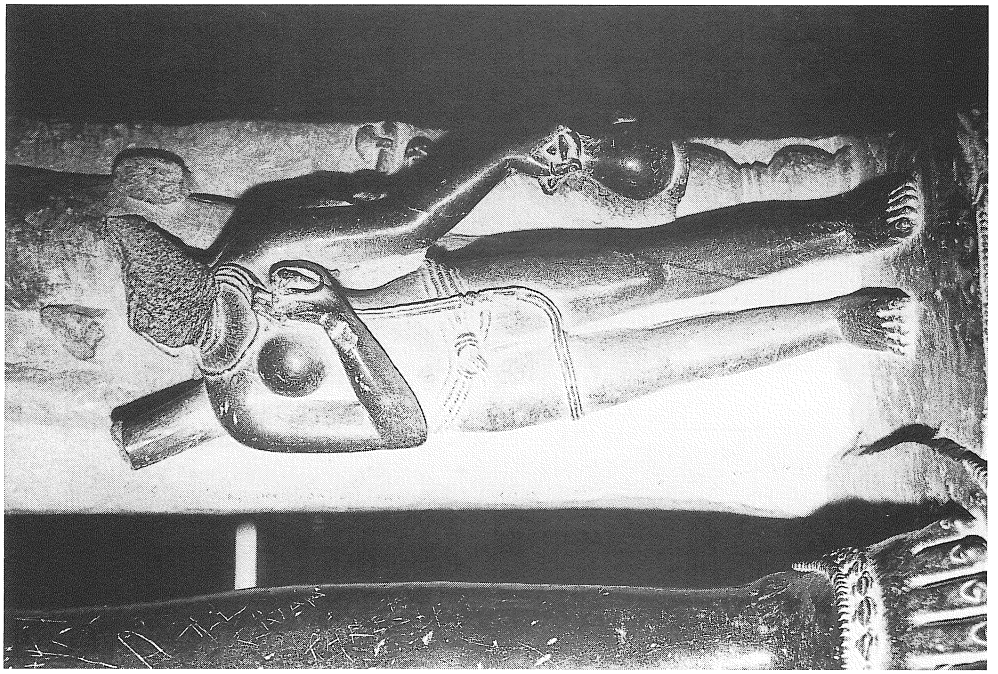


図21　図２部分（左脇侍のプリクティー）

図24　図23部分（左脇侍）

図23　四脇侍をともなう四臂観音立像

図26　四脇侍をともなう六臂観音立像

図25　図23部分（右脇侍）

図28　カサルパナ観音坐像

図27　二男尊脇侍をともなう二臂観音坐像

図30　金剛手立像

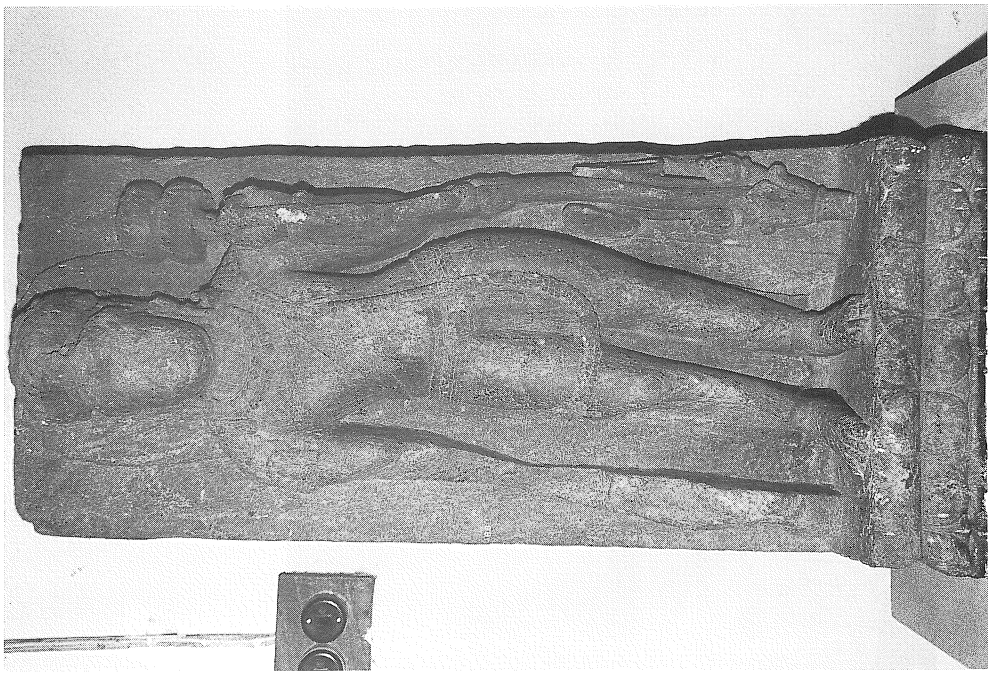


図29　蓮華手立像

図32　図３部分（頭部側面）

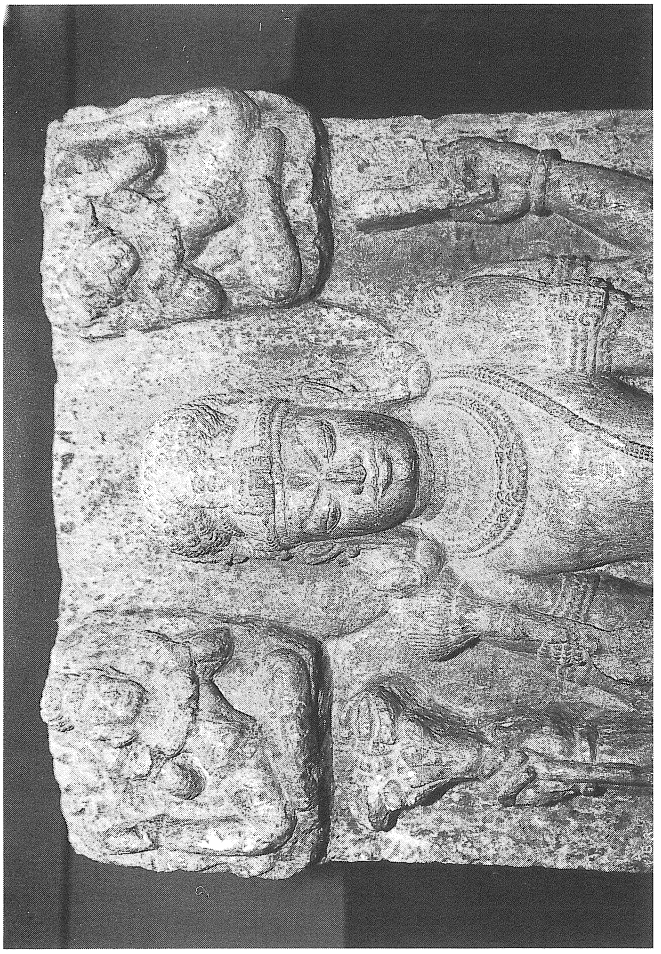


図31　図３部分（上部）

図34　図３部分（左脇侍のハヤグリーヴァ）

図33　図３部分（右脇侍、金剛杵を持つ女尊）

図36　マンジュヴァラ坐像

図35　文殊坐像（Vajragiri 出土）

図38　ターラー坐像

図37　文殊坐像（Bhubaneswar 出土）

図40　四臂ターラー坐像

図39　図4部分（台座）

図42　未比定四臂女尊坐像

図41　八臂チュンダー坐像

図44　ヤクシャとヤクシニー

図43　クベーラ坐像